

悠久に香る文化のまちづくりに向けて みすみの文化発信基地

～香月美術館（仮称）建設計画が今～

最終回

夢・輝き・誇り・魅力・心の豊かさ・そして芸術あふれる“ふるさとみすみの創造”と、21世紀に向けた文化の発信基地として、美術館建設計画の必要性和重要性について掲載してまいりました。

「文化というものは自分の人格を形成する一つの要因で、食物は体をつくるが、文化は人格や考え方を育む。したがって一人ひとりがどのような文化を食べて、自分が育ったかを知ることは自分を知ることでもある。

特にこれからの若い世代の人たちこそ、自国（ふるさと）の文化に誇りを持つことが大切である。」と……………。

ところで最終となる今回は、あのシベリヤ・シリーズのモチーフとなった戦地・抑留生活を中心に兵隊としてではなく、画家として画家自身の心象のフィルターを通しての体験や回想を、そしてダメイ（帰国）までをまとめ掲載しました。

◆香月泰男―その芸術と人間像

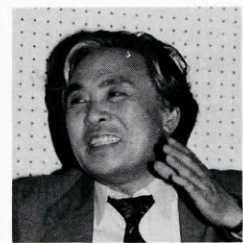
敗戦そして

シベリヤ抑留

一九四五年八月、朝鮮に補給廠を作るため南下中、奉天近くの貨車の中で終戦を知ると、先生は最初に貨車のシートをナイフで切り取って絵具箱の袋をつくりまします。

当時、全てが天皇の所有である軍隊の物資の一部を引き裂いて絵を描くための道具を作る行為のなかに先生は終戦を自覚し、軍人ではなく、ひとりの絵かきに戻れるうれしさでいっぱいだったといひます。

この時はまだシベリヤに抑留されるなどとは夢にも思っていなかったのです。避難民や兵隊でござった返す安東で武装解除させられ、やがて貨車に積み込まれて奉天まで北上、ここで防寒服を支給され今度は鉄格子のついた窓のある有蓋車に乗せられて、くる日もくる日も北上を続けることで先



下関市立美術館
木本信昭副館長

生は終戦―帰国―画家に戻る、簡単に事は運ばないことを知るので。

それでもハルピンの近くでは、ウラジオストクから帰国できるのではと思ひ、それを過ぎるとシベリヤ鉄道経由の帰国に、さらに夢を託したといわれます。それほど妻子が待つふるさと三隅に帰り絵かきに戻りたかったのでしよう。

終戦とともに、それまでの満人たちの日本人への遺恨と憎悪が大爆発、石を投げられリンチを受ける同胞を見聞きした先生は終戦の意味を自分の中で見つめ直すのです。

黒河の対岸ブラゴヴェンチェンスクでは、抑留者といっしょに運ばれてきたコーリヤンや大豆カスを船着場からシベリヤ鉄道の引き込み線まで運搬する荷役作業が待っており、

米一俵（六十キロ）の重さを背に六キロの氷の道を背を丸め蟻のように列をなして歩く様は運搬のための奴隷そのものだったと先生は回想されています。

この光景は抽象化、シルエツト化した「運ぶ人」（一九六〇年制作）になっています。荷役作業を終えた先生達は赤塗りの木造貨車に乗せられ、雪景色の中を西へ西へと運ばれる途中、モスクワを過ぎあ

このパリの運ばれないかなど、絵かきとして馬鹿なことを考えたとも聞きます。

酷寒の

流刑地セーヤ

終戦時ソ連に抑留された日本人は五十万人ともいわれいますが、先生ら二五〇名はエニセイ河を渡り、氷点下三十度の雪道を幌なしのトラックの荷台に詰め込まれてセーヤの収容所に向うのです。

この時は防寒服を着ていても全身がそのまま凍結してしまいそう。「このトラックには死神がいっしょに乗り込んで、自分達を地獄に運んでい